

ふくらく通信

2012年 第1号 3月21日発行
総号数 56 発行人 菅野香織

被災地の写真と 牛乳一本のありがたみ



手元にある小さな箱。これを開くと、画面が出てくる。その画面の向こうに、日々を切り取った一枚一枚の束が詰め込まれ、数千枚にも増えている。

津波のあった場所へ行き、再開した店で会話しながら買物したり、記録を撮ったりする暮らしが二年を過ぎた。

ある日、数日かけて写真を整理した。写真を、見つけ、震災後の日々をしみじみと思い返しながら。

津波に襲われた町は、海水が引いた後、道も線路も港も崩壊した建物の断片で埋め尽くされていた様子が、新聞社の記録に残っている。

一ヶ月後、行方不明な方々への捜索の傍ら、散らした物は端に寄せられ、通り道ができた。数ヶ月かけて片付けられ、各道路が復旧し、7月頃から空地を使って仮設の商店街もでき始めた。

今は、所々に残っている。壊れた建物の解体が進められている。

津波で崩壊した町は、再生するために、一度、土地を整理して町割を新たに、解体や片付けは、今も続いているので二年以上かかるのだ。

新たな町割は、行政と住民との話し合いを重ね、少しずつ考えを組み立て、まとめられていく。それを考え方も持っているものも違、うんが、互いに寄り添うことと成り立つので、そのための時間も必要だ。

あの日、みんな生き残ることに精一杯だった。家族のもとに帰ろうと精一杯だった。離れて暮らす家族や、友人のことも思った。

数日、町では燃料をはじめ、様々な物が不足した。あの頃の写真の中に、「3月20日にや」と買った牛乳という記録がある。

激しい揺れで、電気やガスも止まり、津波で道路がふさがって、町中が何かと停滞した。

我が家は、一週間を満室で何とか乗り切った。冷蔵庫が切れているから、まず生ものからほとんど使う。牛乳は直ぐに飲み切り、あとは我慢だ。

店が再開しても、震災から二週間ほどは、それまで毎日飲んでた牛乳も、大好きな納豆も、品薄で手に入りにくかった。

今は、牛乳も納豆も、また毎日食卓に上るほど手に入る。それでも、牛乳を手にするたびに、あの時のことを思い出す。

あの牛乳一本のありがたみを、この先も忘れないうらう。

